

胃蠕動運動の低下に伴う 消化器症状に六君子湯が 奏効した2症例



佐々木 真美 先生

定禅寺フローレンスクリニック 院長

1998年 明治薬科大学薬学部 卒業

2004年 宮崎大学医学部 卒業

同 年 東北大学病院 初期研修

2006年 国家公務員共済組合連合会 東北公済病院 消化器内科 勤務

2014年 定禅寺フローレンスクリニック 開業

はじめに

胃や食道をはじめとする消化器は、ストレスなどの自律神経障害による影響を受けやすい。これは、胃の蠕動運動の低下を招き、胃内容物の停滞だけでなく、嘔気・嘔吐・便秘などの自覚症状へとつながる。こうした機能的な要素を含む消化器症状に対して、西洋医学的アプローチだけでは治療に難渋するケースがあり、漢方薬を活用している。

そこで、胃蠕動運動の低下に伴う消化器症状に六君子湯が奏効した症例を紹介する。

症例1 過食症に伴う胃拡張と食後の 愁訴の改善例

症 例：44歳 女性。

診察時所見：図1に示す。

経 過：食後の眠気などの気虚の症状を考慮して、クラシエ六君子湯6.0g/日(分2)を投与したところ、2週間後より過食が軽減し、胃内停水(－)となった。易疲労感が残存していたが、4週間後には「以前より食べられなくなった」と興味深い訴えがあり、体重は78kgから74kgまで減少した。さらに8週間後には胃拡張(－)となったため廃業とした(図2)。

考 察：六君子湯は、胃から分泌されるペプチドホルモンであるグレリンに影響を及ぼして食欲を増進させる効果があることで最近注目されているが、古典には「不食」だけ

でなく、現代でいう過食症にも用いられていたことが記載されている(図3)。

本症例は、幼少期からイライラすると過食を繰り返すことが、高じて「いくらでも食べ物が入る胃」になり、久しく「満腹感を感じていない」とのことである。「過食すれば眠れるが、食事を減らすと眠れない」等の訴えについては、一時的に胃の受容性弛緩が起こり、それが長期にわたり繰り返されることで適応性弛緩が過度に起こったものと考え、六君子湯から治療を開始した。

食後の眠気や倦怠感などの愁訴は、胃の適応性弛緩により脾の運化機能が低下し、食物からの気を円滑に取り込めなくなる結果、脾気虚の状態に陥ったと考えられる。

図1 症例1 44歳 女性

現病歴

- 15年前に過食症の診断あり。
- 身長：150cm 体重：85kg BMI：37.8 肥満度：71.8%
- 震災後より疾病が悪化し、マジンドールを処方され、2年間服用したが、その後は自己中断。

主 訴

- 過食症に伴う悪心、嘔吐、胸やけ。
- 食べても、食べても満足感が得られない。
- 食後は堪え難い傾眠・倦怠、疲れやすさ、反面、過食を止めると入眠障害となる。

所 見

- 身長：150cm 体重：78kg BMI：34.7 肥満度 57.7%
- 以前より少しやせたが現在も高度肥満。超音波にて皮下脂肪が顕著だった。胃内停水(+)、四肢末端の冷え(+)。
- 初診日に内視鏡施行、挿気時に過度の胃拡張を認めた。

図2 症例1 臨床経過

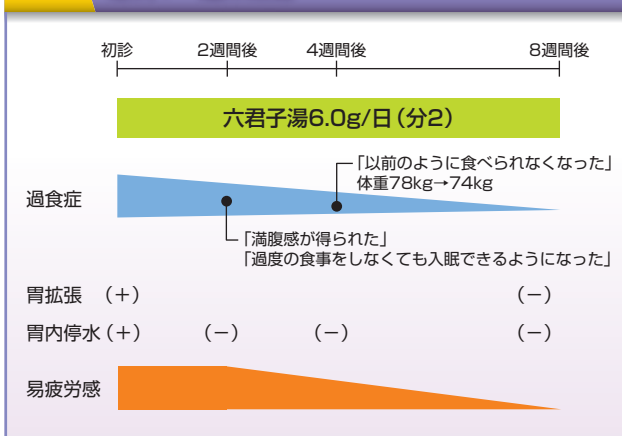


図3 有桂桂里『校正方輿輟』香砂六君子湯

「大腹に箸を伏せたるごとき筋(すじ=正中芯)、任脈通りにあるは、脾胃の虚なり。これあらば、その人、平生泄瀉し下痢し或いは不食或いは飲食過度の者なり。宜しく脾胃を調理すべし。其の方建中(湯)、理中(湯)、六君子(湯)の類なり」

六君子湯の投与で、弛緩した胃の蠕動運動を改善することで、「過度の胃拡張」とともに脾気虚による食後の眠気などの愁訴の改善にもつながったと推察される。

症例2 糖尿病性ガストロパレーシスに伴う 消化器症状と血糖値の改善例

症 例：70歳 男性。

診察時所見：図4に示す。

経 過：3年前に膵臓がんを全摘出したが、患者は炭酸飲料の愛飲家であり、術前より血糖コントロールは不良であった。また、上部内視鏡検査で前日18時に摂取したうどんが16時間後に胃中に残存していることから、糖尿病性ガストロパレーシス(胃蠕動運動機能低下)が血糖コントロール不良につながっていると考え、クラシエ六君子湯6.0g/日(分2)を投与した。2週間後には嘔吐は完全に治まり、空腹時血糖値も200～120mg/dLと落ち着いた。低血

図4 症例2 70歳 男性

現病歴

2型糖尿病(罹病期間：24年)
膵臓がん術後(3年前)

服用薬

ヒトインスリン 12-16-16-0

主 訴

胃重感、1回/週の嘔吐
6ヵ月前より空腹時血糖のコントロール不良あり。
また、同時期に上記主訴あり。
上部内視鏡にて前日18時に摂取した「うどん」が消化されずに残存していた。

検査値/所見

身長：180cm 体重：90kg がっちりした体格。
HbA1c：6.4%
空腹時血糖値：300～37mg/dL
イライラ(低血糖による)、胃内停水(+)

糖によるイライラや胃内停水にも改善が認められた。内服を自己中断した時期があり、その際に血糖コントロールが再度不良となったため、内服の継続を指示し、現在も経過は良好である。

まとめ

原疾患は異なるが、いずれの症例も胃蠕動運動が低下し、嘔吐や低血糖、易疲労感、イライラなどの愁訴が認められた症例であり、症例2は長期にわたる糖尿病罹患に伴う神経障害等の影響で、ガストロパレーシスが認められた症例である。糖尿病患者におけるガストロパレーシスは、摂取した食物の吸収が遅延することで、血糖コントロール不良の原因となる。一方、六君子湯は胃の蠕動運動を改善し、食物の消化吸収を適正なタイミングに改善することで、インスリン投与による低血糖を防ぎ、未消化物による嘔吐も改善できたと考えられる。

六君子湯は脾を立て直すことで、消化器症状だけでなく、脾虚に起因する精神面も含めた多彩な症状にも有用であると考えられた。

Discussion

木村：六君子湯のいろいろな使い方について、興味深い症例をご紹介いただきました。先生は消化器内科のご専門でいらっしゃるようですが、そのお立場から、六君子湯以外の鑑別処方について、追加のご発言をお願いします。

佐々木：受験シーズンの1～3月に、「試験前にお腹が痛い」と訴える患者さんが多く来院されました。そこで、試験前に安中散を服用していただくと、それがお守りようになってお腹が痛くならないということでした。また当院はビジネス街に位置するため、「プレゼンテーションの前に声が出ない」というようなビジネスパーソンが多く来院されますが、そのような患者さんには半夏厚朴湯などを処方することがあります。